

戦前における小学校柔道の教材化に関する研究

—準正課採用以前の取り組みについて—

A Study of Judo Education in the Prewar Primary School System
: Focusing on Practical Situation Before Introducing of the Regular Physical Education Course

池田 拓人

IKEDA Takuto

(和歌山大学教育学部)

受理日 令和3年1月31日

抄録：本研究では、明治44年（1911）に中学校体操科に武道教材が採用されて以降、大正初期頃からは、さらに小学校への導入が議論され始めるなかで、昭和14年（1939）に小学校武道指導要目が制定されて小学校教材として位置づくまでの間、各地の小学校において試みられていった小学校柔道の教材化に向けた取り組みの内容と実施状況の実態的把握を行うことを目的とした。大正期以降、随意科目として柔道を実施していった実践校・研究校において柔道の指導内容・方法についての実践研究が行われ、小学校では講道館の「柔の形」を中心教材に位置づけながら、発展的に平易な技の学習に進んでいくというかたちで行われた。昭和に入ると「柔の形」にかわって「精力善用国民体育」に移行していくようになるが基本的な方針は維持され、実践研究を踏まえながら、講道館が中心となって小学校柔道の指導内容・方法が集約されていった。

キーワード：小学校、柔道、戦前、教材化、柔の形

1. はじめに

1.1. 学校柔道の現代的教育課題

平成24年（2012）から中学校の保健体育科において、武道必修化が完全実施となった。とりわけ、柔道については、その内容・方法について安全面や指導法をめぐる問題について様々な議論がある。さらに、学習指導要領に示されている中学校保健体育科の武道以外の運動領域（体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、ダンス）には、それぞれに対応する小学校体育科の運動領域が学習指導要領において設定されていて、学習内容の系統性を持った小中の接続が図られていると言える。一方で、ただ一つ中学校の武道領域には、そこに接続する小学校体育の運動領域が存在しない。生徒たちの多くは、関連する内容をほとんど未経験のまま、中学校で初めて武道の学習を始めることとなり、系統的学習の観点から中学校武道を円滑に実施するうえでの課題として指摘されている。新しい学習指導要領では、小中接続を円滑にするための系統的な学習カリキュラムの構築を目指しており、小学校にその接続領域を持たない中学校武道領域に関して、

どのように考えていくのかという教育研究は緒についたばかりである。

近年、体育科教育の分野において、小学校体育の体づくり運動領域で中学校武道につながる対人的な運動を取り入れた授業実践研究の機運が見られる。このような、小学校における多様な動きや安全教育に資する身体の使い方（例えば、受け身など）を学習する単元計画の構築と、系統性のある武道指導のあり方を模索するうえで、歴史的アプローチによる過去の事例研究は有効であろう。後述するように、わが国の近代教育史上において戦前の一時期に小学校において武道（柔道）が組織的に実践されていたことがわかっており、その部分に焦点をあてる。すなわち、本研究によって得られる知見は、現代的教育課題に対する波及効果が期待できるとともに一つの有効な視座を与え得るものであると考える。

1.2. 歴史的背景と研究の目的

わが国の正課体育における武道の歴史は、明治44年（1911）に中学校体操科の教材に採用されたことを起点として、昭和6年（1931）には中学校で必修化を

果たすなど、学校武道は中等教育で先行して実施され、そして量的にも拡大していった。そのため、これまでの体育史研究における学校武道に関する叙述は、その多くが中等教育を中心に描かれており初等教育が対象とされることはほとんどなかった。剣道に関する研究では、香田ら（1997）¹⁾による戦前の小学校剣道に関する制度的整備についての研究成果があるが、柔道については見当たらない。いわば、小学校柔道の実践状況については近代日本の学校体育史において欠落しているといつてよい。

柔道が小学校体育の教材として行われていたのは、昭和14年（1939）に小学校武道指導要目が制定され準正課として実施されるようになってから終戦までの数年間であったため、これまでほとんど取り上げられることがなかったと考えられるが、それ以前の大正初期から小学校への導入に向けた実践研究が全国各地の小学校で盛んに行われていたことがわかってきており、そうした実態把握を行うことは近代日本の学校における柔道教育の全体像を知るうえで重要であると考ええる。そのためにも、戦前の学校体育において中等教育から初等教育へと武道が辿った道筋を精緻に検証する必要性がある。

そこで本研究では、中学校の体操科に武道教材が採用されて以降、大正初期頃からは、さらに小学校への導入が議論されはじめるなかで、昭和14年（1939）に小学校武道指導要目が制定されて小学校の教材として位置づくまでの間、全国各地の小学校において試みられるようになっていった小学校柔道の教材化に向けた取り組みの内容と実践状況の実態的把握を行うことを目的とする。なお、本研究は文献研究を主たる分析方法とし、当該期に出された柔道関係書及び体育・教育関係雑誌を対象とする。

2. 準正課以前の小学校での実施状況

2.1. 随意科としての展開

明治15年（1882）、教育者であった嘉納治五郎は講道館と名付けた道場を興し、ここに柔道は創始された。嘉納は、柔道を構想した初期の段階から学校正課教材への導入を課題としていたことから、柔道の目的に「体育」を掲げて、そのための具体的な指導内容・方法を模索していった。一方で、明治期における文部省は、一貫して武術の正課不採用方針を堅持していたため、嘉納は柔道を学校体育教材として適用させるための工夫を様々に図って柔道の教材化を試みていった。そして、明治44（1911）年に中学校体操科の選択教材として正課採用を果たすのであった。翌年には、師範学校（男子）においても同様に正課教材に採用されるなど、学校柔道は中等教育を中心に広がっていくこととなった。²⁾

中学校の正課教材に採用となって以降、大正期以降は小学校へも武道教材を採用すべきとの議論が次第に高まっていくことになる。正課教材採用への道筋は、明治期における中学校への導入過程がそうであったように、国会への請願という政治運動と、学校現場での実践研究を中心に実績を重ね広げていくという双方からのアプローチが同時進行していくかたちが小学校の場合においても同様に進んでいった。帝国議会衆議院への請願は、大正5年（1916）が発端となり昭和13年（1928）までの間、たびたび議会での議論が重ねられている。国会での審議過程については、香田ら（1997）の研究において詳しく整理されているため、本稿では大正期以降の小学校での柔道の実践の実施状況について見ていくこととする。

表1は、大正6年（1917）10月1日現在の全国の小学校における柔道実施状況調査の一覧である³⁾。柔道の実施校数は全国で159校となっており、全体の約0.75%という状況であった。同調査において剣道の実施校数が957校（約4.55%）であったことと比べてもこの時点では柔道を実施していた小学校はまだ非常に少なかったことがわかる。

次に、各学校で柔道を開始した年度（表中の実施年度）を見てみると、大正2年（1913）以降に新たに実施し始めた学校数（116校）が実施校数のうち7割以上を占めている。この背景としては、同じ時期に中学校において武道（柔道）が正課教材に採用されたことに加えて、大正2年（1913）には文部省が初めて学校体操教授要目を制定して学校体育の教材内容を明示したことで、各学校において体育の教育内容の整備拡充を図る機運が見られたのではないかと推察される。もちろん、この時点で小学校において武道（柔道）は正課教材ではないため、正課時間外に随意科目として実施するという状況であった。いずれにせよ、大正期に入ってから徐々に小学校で実施され始めていったことがわかる。

さらに、表1の実施場所を見てみると、「教室」「体操場」「教室及体操場」「その他」と区分されているが、おそらく「その他」にはいわゆる専用の柔道場を含んでいるものと考えられる。「その他」は53校あり、実施校数に対して33.3%となっている。これについては、無回答や複数回答をしている学校があるため、その分を考慮する必要はあるが、量が敷かれた道場を有している小学校は少なく、教室や屋内の体操場に畳を敷いて行っている場合が多かったようである。このことは、中等学校において正課教材に採用される直前の明治40年頃には「中等以上の官公私立学校に於ては殆んどすべて道場の設備なきものなき」⁴⁾という状況であったことから、今後小学校で柔道の正課教材採用を目指していくうえでは施設環境の整備ということが大きな課題となってくることがわかる。

表1 小学校における柔道実施状況 (大正6年10月1日現在)

	小学校数	実施校数	実施年度			実施場所			
			明治40年以前	明治42~45年	大正2~6年	教室	体操場	教室及体操場	その他
北海道	1,275	7	-	-	6	1	1	1	1
青 森	426	1	-	1	-	-	-	-	-
岩 手	447	3	-	-	3	-	1	-	2
宮 城	328	-	-	-	-	-	-	-	-
秋 田	396	17	-	6	11	12	4	10	3
山 形	387	8	1	-	7	-	7	-	-
福 島	537	-	-	-	-	-	-	-	-
茨 城	585	-	-	-	-	-	-	-	-
栃 木	441	1	-	-	1	1	-	-	-
群 馬	279	2	-	-	2	-	-	-	2
埼 玉	440	1	-	-	1	1	-	-	-
千 葉	467	3	-	-	3	1	1	-	-
東 京	525	8	-	2	6	4	1	-	3
神奈川	307	4	-	-	4	3	1	-	-
新 潟	897	3	-	2	1	-	3	-	-
富 山	340	2	-	1	1	1	1	-	-
石 川	401	-	-	-	-	-	-	-	-
福 井	289	1	-	-	1	-	1	-	-
山 梨	253	1	-	-	1	-	-	-	1
長 野	454	4	-	-	4	-	-	-	4
岐 阜	480	3	-	-	3	-	1	-	2
静 岡	498	4	-	1	3	2	-	-	1
愛 知	649	-	-	-	-	-	-	-	-
三 重	450	1	-	-	1	-	1	-	1
滋 賀	238	5	2	1	1	-	3	-	1
京 都	401	3	-	-	3	-	2	-	1
大 阪	457	6	-	-	6	2	2	-	2
兵 庫	622	18	1	2	11	3	3	-	8
奈 良	371	5	-	-	4	-	1	1	2
和歌山	393	-	-	-	-	-	-	-	-
鳥 取	250	1	-	-	1	1	-	-	-
島 根	437	-	-	-	-	-	-	-	-
岡 山	546	6	-	-	5	-	1	1	3
広 島	731	10	1	1	9	5	-	-	7
山 口	408	9	-	-	8	4	-	-	4
徳 島	314	2	-	1	1	1	-	-	1
香 川	239	-	-	-	-	-	-	-	-
愛 媛	514	2	1	1	-	2	-	-	-
高 知	420	-	-	-	-	-	-	-	-
福 岡	601	8	1	1	4	5	1	-	-
佐 賀	184	2	-	-	2	1	-	-	1
長 崎	402	-	-	-	-	-	-	-	-
熊 本	555	-	-	-	-	-	-	-	-
大 分	384	6	1	5	-	1	1	-	2
宮 崎	271	1	-	-	1	1	-	-	-
鹿児島	580	1	-	-	1	-	-	-	1
沖 縄	137	-	-	-	-	-	-	-	-
総 計	21,006	159	8	25	116	52	37	13	53

その後、小学校における柔道実施状況に関する全国的調査データが見当たらないため、大正6年以降の実数の詳細な推移を把握することはできないが、剣道について見てみると昭和13年（1938）の調査⁵⁾によると小学校での実施校数が全国で5,908校となり、大正6年時点と比べて実施校数が6倍以上にまで増加しており、全国の小学校の約3割が実施するまでになっていた。

表2は、東京の小学校における柔道及び剣道の実施校数について、大正6年（1917）と昭和11年（1936）を比較したものである⁶⁾。ただし、前者は東京府（現在の東京都全域に相当）、後者は東京市⁷⁾（現在の東京23区域に相当）が対象地域であるため単純な比較はできないが、おおよその推移を見るための参考データとして見てみたい。まず剣道は、先述した全国的な推移の状況と比較的似たような増加傾向が見てとれ、やはり昭和10年代になると東京市においても約3割の小学校で剣道が実施されていることがわかる。一方、柔道についてはもともとの実施校数が剣道に比べると少ないなかで増加傾向は見られるものの剣道ほどの大きな伸びが見られず実施校数の大幅な拡大までには至っていないと言えるであろう。

表2 東京における小学校での実施校数

	大正6年(1917) 東京府	昭和11年(1936) 東京市
柔道実施校	8 (1.5%)	20 (3.7%)
剣道実施校	39 (7.4%)	179 (33.0%)
小学校総数	525 (100%)	542 (100%)

これには、やはり小学校において畳の柔道場を有しているかどうかという施設の問題が関係していることがうかがわれる。上記の昭和11年の調査報告によると、柔道の実施校20校のうち柔道場を有している小学校は僅か3校であったことから、人口の多い東京においても施設整備は進んでいない状況が見てとれる。さらに同報告では、「道場を有しない学校の多くは必要に際して屋内運動場に畳を敷いて施行しているものである。剣道は道場と称するものがなくとも屋内運動場で行うからその点は好都合である。」⁸⁾と分析していることから、単に専用の武道場を小学校において有しているかどうかということだけではなく、畳の必要の有無ということが教室や体操場・講堂といった屋内施設を転用して実施することが可能な剣道との大きな違いとして、柔道の実施校数が低調な要因の一つとなっていることがあらためて確認できる。

2.2 課外活動としての展開

ここまで、いわゆる随意科目として授業形態での実施状況の推移について見てきたが、このほかに課外活

動として小学校において柔道が展開されるということがあった。あくまで課外活動であるため授業とは異なるものであり、有志で希望する児童を対象として実施されるものであるが、正課以前の学校への普及の導入段階においては最初から随意科目として授業の形態によって始めるよりも、まずは課外活動の形態から行われる場合が多かったようである。実際に、課外活動として始めた小学校のなかには、次第に参加者が増え、また教育的成果も認められていくことにより、「最初は有志の者ばかりであったが今は殆んど全体に及んで」⁹⁾「正課の様に…（中略）…教えて居る。」¹⁰⁾といったように課外活動が発展していくなかで随意科に転換していった例も数多くあったようである。

随意科は正課ではないため、正課時間外である放課後に時間を定めて行われていたことから、対象となる児童が有志なのか否かという違いはあるが、外形的な実施形態は課外活動とかなり似通っていたものと考えられる。基本的に指導者は当該小学校の教員を中心として行われるため指導内容・方法も両者で類似していた可能性も高かったのではないかと推察される。したがって、小学校における課外活動の状況を見ることで、小学校柔道の実施状況の一側面を把握することができると考えられる。ただし、授業とは異なり課外活動の実数については、行政当局等が調査集計したようなデータがあまり見当たらないため、小学生を対象に開催された地域単位の武道大会等の試合に参加した学校数の整理から実態把握を試みる。

まず大正期は、中等学校において武道（柔道）が正課の選択教材として実施され始めたことで、次第に小学校での柔道熱も出はじめ、課外活動としての柔道部が徐々に創設され始めた時期である。そのため、まだ柔道部を持つ学校数も少なかったため、近隣で柔道部を持つ学校同士の対校試合を中心に行われていたようであり、地域規模の大会の記録は雑誌等の記事を見る限り見当たらず、まだ十分な参加校数を得られるほどの状況ではなかったのかも知れない。大正6年(1917)の記事によると「柔道熱はいよいよ盛んならんとして居るが悲しい哉、実際に教授の任に当る適当の人を得られないで閉口して居る…（中略）…欠陥を補ひ、この必要に應ぜしむる方法は唯一つある。…（中略）…師範学校に於て盛んに柔道を課し多数の黒帯を出すことこれなり。」¹¹⁾とあるように、とりわけ柔道の指導をすることができる小学校教員の確保が追いついていなかったことも、その要因の一つといえる。

小学校教員を養成する師範学校においては、柔道が正課体育の選択教材に採用されて、まだ数年しか経っておらず、柔道指導が可能な教員を十分に輩出する段階には至っていなかったということがあり、指導者の養成が急務の課題としてあったとともに、全国の各小学校にそうした教員が十分に供給されるまでには一定

の年月を要することも明らかであった。

地域規模の大会が各地で盛んに行われるようになるのは昭和に入ってからであった。表3は、大会の詳細を継続的に確認することができた東京の「都下小学校柔道大会」の参加校数を一覧にしたものである¹²⁾。

表3 都下小学校柔道大会の参加校数

		尋常科	高等科	合計
第一回	昭和9年(1934)	19	17	36
第二回	昭和10年(1935)	15	14	29
第三回	昭和11年(1936)	14	10	24
第四回	昭和12年(1937)	10	10	20

柔道部を有している学校のすべてが大会に参加していたわけではないであろうから、当然ながらこの参加校数をもって東京の小学校柔道部の現況そのものではない。ただし、東京の小学校総数が500校以上を遙かに超えていたことからすると、柔道部を有して課外活動として実施していた小学校は全体の5～6%程度ではなかったかと推測される。この状況は、表2のデータと併せて総合的にみても大きくかけ離れたものではなく、小学校における柔道実施の広がりとは剣道に比べると低調に推移していたと言えるだろう。

こうした状況のなかで随意科あるいは課外活動として柔道を実施していた小学校において比較的共通している状況を整理すると以下ようになる。まず、実際に柔道を指導することのできる柔道経験を持った小学校教員が在職しているということである。熱心に指導に関わっていく中心的存在は不可欠であった。さらに、正課ではない柔道(武道)を実施する上では、まず校長の理解が得られなければ実現には至らない。実施校の多くでは、校長自らが武道教育に熱心であることも多く、そうした校長が着任したことで実施に至る場合もあった。加えて、各小学校を所管している地方教育行政が同様に武道教育に大きな関心を持つと施設整備も含め近隣の学校への波及や地域における研究校として拠点的な取り組みへと広がっていくことになる。¹³⁾

以上のことから、小学校での柔道実施のためには、畳を有する道場(あるいは代替施設)の有無という物的条件と指導可能な教員の確保という人的条件の両面において大きな課題を抱えていたことが明らかとなった。今後、小学校において正課として実施していくことを目指すには、これらの問題をクリアしなければならないということでもあった。

3. 小学校における実践研究の事例

柔道が正課教材に採用された中学校では、いわゆる乱取で用いられる投技を主教材として位置づけた。中学校柔道では、「基礎の習得」ということが重視され、

授業で取り扱う技の種類や難易度についても概ね基礎的な技が中心となっていた。指導順序についても段階的指導の視点に配慮が置かれ、とりわけ乱取技の練習に入る前の導入教材として講道館の形のひとつである「柔の形」¹⁴⁾が位置づけられ、初心者指導法として確立していくこととなった。¹⁵⁾

「柔の形」は、講道館の形のなかで最も体育的な形とされている。形を考案した嘉納治五郎が「柔の形とは相手の力に逆はず柔の理を応用して種々動作する間に、体育的に全身の運動をなさしむるやう仕組みたるものなり。」¹⁶⁾と説明しているとおり、「柔の形」では相手を投げるといった動作は行わず、相手と組み合せて、押す、引く、伸ばす、廻す、捻るといった基本動作を繰り返すなかで攻防の理屈(相手の動きを制す、あるいは投げるまでの仕組み)を理解できるように組み立てられた内容となっている。動きも非常に緩やかで、投げることもしないため安全にも配慮されており、誰でも取り組み易いものとして設えられていた。

「柔の形」は、内容的にみても保健的体操や体ほぐしの機能を持った形であったと捉えることができ、柔道を学習していく上での「身のこなし」を習得することに適していたといえる。嘉納自身も「乱取の前にこの形(筆者註:柔の形)で身体の練習をし柔道の原理の一斑を味はつて本統の乱取に取掛ると順序がよい」¹⁷⁾としており、乱取技の練習に入る前に「柔の形」によって、身体の使い方を覚えさせ、より激しい運動ができるようになるための動きを予め身につけさせることが意図されたものであったことがわかる。

大正期に入り、中学校に続いて小学校への武道教材の導入が議論され始めるようになると、中学校で導入教材として位置づいた「柔の形」を小学校における柔道指導の中心教材とする実践研究が試みられるようになる。初心者指導法として、中等教育において「柔の形」が実績を上げていくと、嘉納自身も「柔の形から這入った柔道の如きは女子でも小学児童でも出来る」¹⁸⁾としたうえで、「是非之れ(筆者註:柔の形)は小学児童の体育として勧めたい。」¹⁹⁾と述べて、小学校体育への導入を企図していくようになった。

このことについて、講道館および東京高等師範学校において柔道の教科指導法研究の中心的立場にあった村上邦夫は、「師範学校中学校では、既に柔道は正科として課せらるゝに至ったが、輓近の趨勢は、小学校に於ても柔道を課する様になって来た。…(中略)…小学校に柔道を課するとすれば、柔道の如何なる教材を用ふるか、…(中略)…要するに柔の形がその教材として主要なものであるといふ事は、柔道教育に経験のある者の一致する考である。」²⁰⁾と述べており、小学校の授業で行う場合は「柔の形」を中心教材として指導するのが適していると明示している。その理由として「吾輩は小学校に於ける柔道は、体育を

中心として教授するが一番宜いと考へる。…（中略）…要するに柔道の体育的方面から、柔道の真の修行に入るその初歩の一部といふ處を小学校柔道の柔の形教授の目的とするが適切であると考へるのである。」²¹⁾としている。つまり、子どもの発達段階に応じた運動の負荷や難易度等を考慮して、柔道の練習過程のなかで最も入り口の部分でもある小学校では体育的な形である「柔の形」によって行うということが示されている。

こうした背景から、実践研究の動きは小学校関係者の間にも広がりを見せ、実際に小学校において「柔の形」を中心とした柔道授業の実践を行う学校も全国各地に見られるようになっていった。

大阪の天王寺師範学校附属小学校では、大正4年（1915）より児童に柔道を課していたところであったが、翌大正5年（1916）2月には嘉納自ら同校に視察に訪れている。当日の様子について、「柔の形の中より児童の覚え易きもの八九本に、簡単なる乱取の業を加へ、号令を以て多数の児童を一斉に運動せしめる仕組である。教師の説明する所によれば、この練習を始めてから、未だ僅に四箇月を経たのみであるとの事であるが、それにしてはなかなか能く各種の動作が法に適ひ、又児童自身も楽しんで行ひ居るやうに見受けられた。…（中略）…体力増進の傾向を十分に認め得られるし、病気に罹ったものも無かったといふ事である。」²²⁾との好結果を報告している。



（るらせ授教を形の柔に童兒くし親範師納嘉）

写真1 天王寺師範学校附属小学校で柔の形を指導する嘉納²³⁾

同校での視察の結果については嘉納自身も「現に小学教育に於ける柔の型の効果は大阪市の天王寺師範学校に於て一ヶ年間実際に研究して精密なる調査をして其結果大いに有益である、害は少ないと云ふ事が既に

明かになったのである。其等から考へて見ても是非之れは小学児童の体育として勧めたい。」²⁴⁾と高く評価し、小学校における「柔の形」の教材としての有効性に自信を深めている。

名古屋では、大正6年（1917）12月の記事によると「中区三蔵尋常小学校では柔道の柔の形を六年の男女生に課し目下研究的に盛んに行はれて居る。柔の形を初めたのは昨年（1916）の事からであったが、その初めはとかく振るはなかったけれど、九月に至り四段田口隆弘氏が名古屋へ柔道教師として着任して以来、講話なり実地なりについて盛んに奨励し、目下は同校でも氏を聘して柔の形の教習を続け大に進歩発展の途に就いたのである。」²⁵⁾と報告されている。

また群馬県では、渋川小学校と岩野谷小学校の二校において比較的早い時期から随意科として柔道の実践が始まっていた。両校では、拠点的な研究校として実践が取り組まれていたことがわかり、嘉納をはじめ講道館関係者も視察に訪れたり、また学校・教育関係者を招いた公開授業といった研修会なども行われていた。両校の実践を詳しく見てみる。

まず、渋川小学校では、大正6年（1917）1月から随意科として柔道を課していた。対象としたのは、高等科1、2年生の男子であった。授業は、毎週土曜日の放課後に1時間半から2時間程度実施され、嘱託教師の石橋二段（当時）を主として柔道経験のある教師数名が補助として指導にあたった²⁶⁾。

表4は、渋川小学校の柔道授業における指導内容について示したものである。

表4 渋川小学校における指導内容²⁷⁾

実施の方法	
い、形	… 体操法柔の形
第一教	突出、肩押、両手捕、肩廻、腮押
第二教	切下、両肩押、斜打、片手捕、片手上
第三教	帯捕、胸押、突上、打下、両眼突
ろ、業	
受身	第一動、第二動、第三動
は、教授の順序	
受身の業	形 乱取
に、指導方法	
イ、児童学年別に教授す	
ロ、受身の業を充分練習し然る後に柔道の形及乱取に入る	
ハ、示範より実際に及ぶ	
ニ、易より難に進む	
ホ、毎時既知事項を練習し未知事項に入る	
ヘ、終りに本日の主眼点を原理及実施の二方面に互り児童に発表せしむ	
ト、常に姿勢を注意す	
チ、静寂を厳守せしむ	
リ、道場の清潔整頓に留意せしむ	
ほ、教授上の注意	
甲、（児童心得）	【略】
乙、（稽古場に於ける心得）	【略】

指導順序としては、児童の発達段階と安全面に配慮して、受身を十分に習得してから、「柔の形」によって基本動作や身のこなしを覚えた上で、投技および乱取へと発展的に進んでいくことがわかり、段階的指導の観点への配慮も見えてくる。

次に、岩野谷小学校では、大正5年（1916）4月から「柔の形」のみを指導していたが、大正6年（1917）3月からは乱取なども合わせて実施するようになった。対象としたのは、尋常科6年生と高等科1、2年生で、女子については「柔の形」のみを指導していた。授業は放課後に1時間実施され、尋常科6年生は週2日、高等科1、2年生は週3～4日程度で行われ、同校教師の須藤幸平初段（当時）が中心となって指導にあたった。実施場所については、唱歌室の一部を道場に充て、大正7年（1918）時点では畳20枚、稽古着10枚、児童所有の稽古着32枚という状況で実施をしていた²⁸⁾。もともと、乱取を始めるようになった大正6年の際には、職員の寄付によって畳10枚、柔道衣5枚が購入されたところから始まったが、翌年には村長も柔道の教育上の効果を認めて、有志の寄付を募って畳数を増やし道場の整備が進んでいった²⁹⁾。

同校における指導順序は、「形の意義等を授け形の実演に入り漸次受身（倒れ方）を練習せしめ稍熟達するに及びて稽古着の名称、姿勢作り掛け等を教授して後乱取に入らしむ。」³⁰⁾ というものであった。表5は、岩野谷小学校の柔道授業における形の指導内容について示したものである。

表5 岩野谷小学校における形の指導内容³¹⁾

1. 形（講道館体操法柔の形）	
柔の形教授配当表	
学年	形の手数
尋六	第一教
	突出、肩押、両手捕、肩廻、腕押
高一	第二教
	切下、両肩押、斜打、片手捕、片手拳
高二	第三教
	帯捕、胸押、突上、打下、両眼突
高等科女生にありては第一学期に第一教を第二学期に第二教、第三学期に第三教を授く。	

同校の柔道授業においては、まず形の指導から始めるというもので、やはりその内容は「柔の形」であった。それから、受身を十分に習得させてから技・乱取へと進んでいくということであった。先述の洪川小学校では、受身から始めて、形（柔の形）、乱取という順であったが、岩野谷小学校では、まず形（柔の形）から始めて、受身、乱取という指導順序となっており、学校によって多少の違いがあるものの、柔道の基礎的な動きと身のこなしを「柔の形」によって習得してから発展的な内容（乱取）に進んでいくというところは共通しているといえる。

岩野谷小学校では、柔道の公開授業や研究会もたびたび行われるようになる。そうした行事の際には「校庭に畳三十枚を敷き詰め」³²⁾ で行われ、県内および近隣地域の小学校長や教師あるいは村長ほか行政関係者も視察に訪れて、同校の須藤教師による公開授業や児童による「柔の形」の演武が行われた。こうした状況はやがて県外にも知れ渡り、東京からの視察もあった。大正7年（1918）3月には、村上邦夫（東京高等師範学校助教授）が同校へ視察に訪れている。須藤の指導を実際に見学した村上は、「同校は洪川に於ける教授とは少しく色彩を異にするが、同じ方法による所も少なくない。…（中略）…要するに柔道を小学に課したる成績は良好である指導其宜しきをうれば立派に体育の目的を果たし得。」³³⁾ と高い評価を与えている。

当然ながら、こうした情報は嘉納のもとにも届いていたことは想像に難くない。やがて嘉納は、その研究成果を実地見聞するために大正10年（1921）9月に同校へ視察に訪れている。視察では、まず女子児童による「柔の形」が第一教から第三教まで実演された。続いて、男子児童による柔道授業が行われ、基本的練習として受身とともに「柔の形」を行った後に乱取に入るといった流れの授業が展開された。この授業では、終盤にも整理運動として「柔の形」の中のいくつかを行わせていた。終了後には、嘉納を交えて研究会が催され、嘉納による講演も行われた³⁴⁾。



写真2 岩野谷小学校の児童による「柔の形」の演武³⁵⁾

岩野谷小学校で柔道の中心的指導者として実践を行ってきた須藤幸平は、大正11年（1922）10月、同校での実践をもとにしてまとめられた指導書『小学校柔道教授の実際』を村上邦夫との共著（補筆）のかたちで講道館文化会より出版することとなった。同書の巻頭には講道館指南役（八段）の山下義韶の序文が寄せられ、また出版以後、講道館の機関誌（月刊）にも頻繁に同書の広告が掲載されるなど、その内容は講道館に認められたものとして柔道関係者に知られるところとなり、以降の小学校柔道の指導モデルとなっていくものと考えられる。

同書では、尋常科5年、6年、高等科1年、2年の各学年の教材配当表が示されている。これまでの各地での実践事例では、柔道を課す学年が学校によって違い、尋常科5年生からの場合や6年生から課す場合、あるいは高等科1、2年生のみの場合と様々であった。先に見たように岩野谷小学校においても尋常科6年生から柔道を課していたが、これまでの実践研究の結果から柔道を課す対象は尋常科5年から高等科2年までとするというかたちに至ったものと言えるであろう。なお、女子には「柔の形」のみを課すこととして女子の「柔の形」の学年別配当表も示されている。表6は尋常科5年生、表7は尋常科6年生の教材配当表の内容を示したものである。

表6 尋常科第五学年配当表³⁶⁾

第一学期	第二学期	第三学期
説明 (1)私共は何故に柔道を稽古するか (2)柔道を稽古するものは如何なる心掛が大切か		
姿勢 自然体	姿勢 自然体	姿勢 自然体
形(柔の形)	形(柔の形)	形(柔の形)
突出	突出 肩押	突出 肩押 腰押
	受身	受身
	第一段(イ、ロ、ハ)	第一段(イ、ロ、ハ)
		補助練習 正坐して倒し合ふ 坐り相撲

表7 尋常科第六学年配当表³⁷⁾

第一学期	第二学期	第三学期
説明 柔道の価値 稽古着の名称 注意 大小便 手足の爪 呼吸	説明 本気であれ 礼儀を正しくせよ	説明 元気を振って練習せよ
姿勢 自然体 自護体	姿勢 同 左	姿勢 自然体 自護体
受身 第一段 後方受身 前方受身	受身 同 左	受身 第一段 後方・前方受身 前方廻転受身
作 前・右左前隅	作 前 同	作 前・右左前隅 右左後隅
掛練習の案 浮落 浮腰	掛練習の案 浮落 浮腰 背負投	掛練習の案 浮落 背負投 浮腰 大外刈
形(柔の形) 突出 肩押 腰押 片手上	形(柔の形) 腕投練習 肩廻	形(柔の形) 腕投練習 切下
乱取 (投業) 浮落 浮腰	乱取 (投業) 浮落 浮腰 背負投	乱取 (投業) 浮落 浮腰 背負投
	出足払 (固業) 袈裟固	出足払 大外刈 (固業) 袈裟固
補助運動 一線上にて出し合ふ立 姿にて倒し合ふ	補助運動 伏臥反身	補助運動 前同練習
	足の払方	

柔道の学習が始まる最初の5年生では、「柔の形」が内容の中心に位置づいていることがわかる。「柔の形」のなかでも第一教の内容に特化して、より基礎的

な内容に重点を置いていることが見てとれる。二学期からは受身の内容が入ってくるが、これは岩野谷小学校での実践でも「柔の形」から始めて、そのあとに受身を学習するという順序であったことから同校での実践を踏襲したものとえよう。

6年生になると「柔の形」に加えて、比較的難易度の低い技の中から投技や固技の内容が少しずつ入ってくるが、内容的に見ても指導の順序や段階については十分な配慮がなされていることがうかがえる。高等科1、2年生の配当表の詳細については紙幅の関係で割愛するが、尋常科5、6年生に引き続いて「柔の形」では第二教、第三教の内容へと進んでいき、技についても新出教材が追加はされていくが、基本的な方針は共通していた。

やがて昭和に入り、嘉納によって、より初心者指導法として汎用性の高い形として「精力善用国民体育(の形)」が考案(昭和2年)されると、従来中学校では導入教材として位置づいていた「柔の形」にかわって「精力善用国民体育」へと移行していき、中学校ではそうした実践が増えていった³⁸⁾。昭和6年(1931)に中学校で武道(柔道)が必修化されると、嘉納は同年、中学校1、2年生用教科書として『柔道教本・上巻』³⁹⁾を著し、そのなかで従来の「柔の形」にかわって「精力善用国民体育」の内容が明示されたことによって、この流れが決定づけられた。小学校においても同様に、中心教材として位置づいていた「柔の形」から「精力善用国民体育」へとシフトしていく傾向に変わりはなかったが、小学校では女子に「柔の形」だけを課していた経緯もあったことから、この二つの形の内容を両方取り入れ混在するようなかたちの実践が見られるようになっていく。以下で、その具体的事例を見てみる。

昭和12年(1937)頃になると、小学校武道採用に向けた帝国議会衆議院への請願が再び活発化し、建議案が可決されるようになり⁴⁰⁾、小学校への正課採用の機運⁴¹⁾が高まりつつあるなか、同年7月には講道館が主催する小学校柔道講習会が文部省の後援を得て開催されることとなった。これは、明らかに小学校の正課としての柔道授業の実施の実現が近いということの表れであり、そのための条件整備として小学校における指導内容の整理と指導者の確保といった意味合いも強かったのではないかと考えられる。

表8は、講習会の概要を一覧にまとめたものである。講師には、嘉納をはじめとして講道館の高弟が名を連ねており、顔ぶれから見ても相当な力の入れようが窺い知れ、小学校正課への導入に向けた期待の高さがわかる。そして、講習内容を見てみると、「単独第一演習」および「単独第二演習」というのは、その内容は「精力善用国民体育」のことであり明確に位置づけられていることがわかる。さらに、「小学校柔の形」として「柔の形」も並列して置かれている。その内容としては、小学校の

指導に必要なものとして5本（突出、肩押、肩廻、片手取、片手上）に精選されたものとなっていた。このように、小学校では「精力善用国民体育」が主内容となりながらも「柔の形」の一部も併存するかたちが取られた点は小学校柔道の特徴のひとつとなっていく。

表8 小学校柔道講習会の内容⁴²⁾

小学校柔道講習会		
		主催 講道館
		後援 文部省
講 師	講道館師範	嘉納治五郎
	同 指 南 役	永岡秀一
	同 指 南 役	佐村嘉一郎
	同 指 南 役	三船久蔵
	同 七 段	村上邦夫
	同 七 段	橋本正次郎
	同 七 段	櫻庭 武
	同 七 段	松岡辰三郎
	体育研究所技師	大谷 武一
	外二	高段者数名
講習科目	柔道本義	
	基本練習	
	単独第一演習(建国体操)	
	単独第二演習	
	小学校極の形(居取、立合)	
	小学校柔の形	
	投技解説及び指導法	
	固技解説及び指導法	
申込者資格	柔道教授法	
	イ、小学校教師にして柔道の素養のあるもの	
	ロ、師範学校、中等学校の体操及柔道教師	
講習会場及日程	ハ、柔道有段者にして小学校柔道の研究に志しあるもの	
	講習会場	
講道館		
七月二十五日より七月三十一日迄一週間、		
毎日午前八時より正午時迄		

こうして、昭和14年(1939)5月の「小学校武道指導要目」公布を目前に、これまでの実践研究を踏まえて小学校柔道の指導内容として収斂されてきたということがわかる。小学校正課での柔道実施に向けて、いわゆるソフト面での整備は進んでいたと言える。

4. 教員研修の取り組み

これまで見てきたように、実践校及び研究校を中心とした実践研究によって小学校柔道の指導内容の整備は着実に進んでいった。施設整備の問題以外に小学校で柔道の実践が量的に拡大しづらかった要因の一つが前述したように指導可能な教員の確保であった。教員養成機関である師範学校からの教員の供給には一定の時間を要することから、同時並行として現職教員に対する研修によって小学校柔道の地歩を広げていくことが量的拡大と質的向上においても不可欠であった。こうした教員研修は、早い段階から研究校を中心に各地方において講習会が行われていた。

名古屋では、大正5年(1916)5月に「名古屋市小学校教員五十名を選出し、武徳会愛知支部道場に於て、柔の形講習会を開催せらる。発起人は小学校長十五名がこれに当たり、当地教育課長等の後援あり」⁴³⁾と報告されており、時期的に見ても初期の事例と言える。

前節で取り上げたように実践研究が盛んであった群

馬県では、たびたび小学校教員を主対象とした講習会が開催されていた。大正8年(1919)には、県主催の講習会と岩野谷小学校主催の講習会が行われている。県主催の講習会は「七月二十日より五日間、村上高師助教授を聘して柔道の講習をした。柔道の本質、柔道の理論、柔道教授法の一般に次いで、柔ノ形を主とし、各種の実際は熱心に演練された。」⁴⁴⁾とあり、小学校教師を中心に61名の修了者があった⁴⁵⁾。また、岩野谷小学校主催の講習会は「八月一日より四日まで、岩野谷小学校にて講習会を開催した。同校訓導須藤幸平氏の立案にかかる、教授の実際を見童に演ぜしめて講習員に示し、村上五段が理論實際を指導して居た。」⁴⁶⁾とあり、修了者は小学校校長及び教師35名であった⁴⁷⁾。

こうした講習会は他にも各地で行われていたが、教師が自らの柔道技術を磨く手段としては、競技として行われる教員大会もその一つと捉えることができるであろう。とりわけ、昭和10年(1935)前後になると小学校教員の柔道大会が各地で開催されていたようである。昭和12年(1937)3月には、第五回石川県下小学校教員武道大会が開催され、剣道と柔道で郡市対抗の試合が行われている⁴⁸⁾。同年6月には、第三回京阪神三市小学校教員対抗武道大会が開催され、京都、大阪、神戸の対抗戦が行われた⁴⁹⁾。

いわゆる競技として大会に参加するためには日々の稽古に励んでいたことと思われ、教師自身が柔道技術の研鑽を積む機会となっていた。また、小学校教員に限定した大会が開催されるということは、小学校現場において柔道の専門的技量を備えた教師の存在が一定数まで行き渡る状況になってきていたものと推察される。

教員の指導力向上には、こうした現職研修が非常に重要である。それとともに、小学校で柔道が正課となっていくうえでは、教員養成機関である師範学校における柔道の教育内容についても今後課題となっていく。

5. まとめ

明治44年(1911)に中学校の体操科に武道教材が採用されて以降、大正初期頃からは、さらに小学校への導入が議論されはじめるなかで、昭和14年(1939)に「小学校武道指導要目」が制定されて小学校の教材として位置づくまでの間、小学校柔道の教材化に向けた取り組みが全国各地の小学校において試みられるようになっていった。

随意科目として柔道を実施していった実践校・研究校において柔道の指導内容についての実践研究が行われ、小学校では講道館の「柔の形」を中心教材に位置づけながら、発展的に平易な技の学習に進んでいくというかたちで行われた。また、昭和に入ると「柔の形」にかわって「精力善用国民体育」に移行していくようになるが基本的な方針は維持されていった。こうした実

実践研究を踏まえながら質的向上が図られ、講道館が中心となって小学校柔道の指導内容・方法が集約されていったことが明らかとなった。

一方で、小学校での柔道実施の広がりや、量の必要という施設整備の問題を要因とするハード面での課題が大きな壁となって、剣道に比して柔道の実施校の量的拡大は随意科及び課外活動とも遅々として進まなかった。また、指導者の確保において、教員養成機関である師範学校での柔道教育の充実も小学校正課での実施に向けた課題として示唆された。

昭和14年(1939)に「小学校武道指導要目」が制定されて準正課として位置づくようになると、これらの諸課題についてどのように対応していったのか、またこの間の実践研究を踏まえて集約されてきた指導内容・方法は同要目にどのように反映されたのかについては、今後の課題となる。

付記 本研究は JSPS 科研費 JP20K11486 の助成を受けたものです。

本文註

- 1) 香田郡秀・中村民雄・小林義雄・長谷川弘一(1997)戦前の小学校における剣道指導要目について、筑波大学体育科学系紀要 20, p.117-125.
- 2) 池田拓人(2014)近代日本における学校柔道の教授内容・方法に関する歴史的研究, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士論文.
- 3) 表1は以下より作成した。著者不詳(1919)小学校の撃剣柔道, 体育研究, 7, p.19-23.
- 4) 鈴木安一(1908)柔道の真髓, 有朋館, p.49.
- 5) 文部大臣官房体育課(1938)小学校ニ於ケル剣道実施ニ関スル調査.
- 6) 表2のうち、大正6年については前掲3)で示した資料より作成し、昭和11年については以下より作成した。田中(1936)東京市内に於ける小学校柔道の現況, 柔道, 7(9), p.16.
- 7) 東京市では、昭和7年(1932)に周辺市郡との合併により従前の15区から新たに編入された20区を加えて35区となり、市域が大幅に拡張されたことに伴って学校数も大きく増加している。
- 8) 田中(1936)東京市内に於ける小学校柔道の現況, 柔道, 7(9), p.17.
- 9) 土屋金七(1920)三重県大淀村の修武会, 有効の活動, 6(9), p.62.
- 10) 前掲9), p.62.
- 11) 福本弥太郎(1917)小学校の柔道と師範学生に対する希望, 柔道, 3(6), p.128.
- 12) 第一回から第四回までの参加校数は以下より作成した。「第一回都下小学校柔道大会」柔道, 6(1), p.47-49, 1935年。「第二回都下小学校柔道大会」柔道, 6(12), p.30-31, 1935年。「第三回都下小学校柔道大会」柔道, 8(1), p.26-27, 1937年。
- 13) 「第四回都下小学校柔道大会」柔道, 9(1), p.21-22, 1938年。
- 14) 一記者(1919)群馬県の柔道, 有効の活動, 5(9), p.18.
- 15) 「柔の形」の内容構成は以下のとおり。

第一教	突出	肩押	両手取	肩廻	腮押
第二教	切下	両肩押	斜打	片手取	片手拳
第三教	帯取	胸押	突上	打下	両眼突

- 16) 前掲2)。
- 17) 嘉納治五郎(1913)柔道概説, 柔道概要(磯貝一編), p.20.
- 18) 嘉納治五郎(1915)柔の形, 柔道, 1(2), p.44.
- 19) 嘉納治五郎(1917)国民の体育に就て, 愛知教育雑誌, 356号, p.17.
- 20) 前掲18), p.18.
- 21) 村上邦夫(1918)柔の形教授法研究, 柔道, 4(8), p.45.
- 22) 前掲20), p.46.
- 23) 一記者(1916)大阪に於ける小学児童の柔道, 柔道, 2(4), p.62.
- 24) 前掲22), p.63. より転載。
- 25) 前掲18), p.18.
- 26) 著者不詳(1917)名古屋小学校の柔道, 柔道, 3(2), p.123-124.
- 27) 著者不詳(1918)渋谷小学校の柔道, 柔道, 4(6), p.82-84.
- 28) 前掲26), p.82-83. より作成した。
- 29) 岩野谷尋常高等小学校(1918)岩野谷小学校の柔道, 柔道, 4(7), p.94-96.
- 30) 水齋(1921)光栄なる哉柔道少年-岩野谷小学の柔道, 有効の活動, 7(12), p.59-60.
- 31) 前掲28), p.94-95.
- 32) 前掲28), p.94-96. より作成した。
- 33) 著者不詳(1918)岩野谷校柔道演習会, 柔道, 4(5), p.74.
- 34) 村上邦夫(1918)群馬県に於ける小学の柔道, 柔道, 4(5), p.67.
- 35) 前掲29), p.60-64.
- 36) 前掲29), p.62. より転載。
- 37) 須藤幸平(1922)小学校柔道教授の実際, 講道館文化会, p.115-116. より作成した。
- 38) 前掲36), p.116-119. より作成した。
- 39) 前掲2)。
- 40) 嘉納治五郎(1931)柔道教本・上巻, 三省堂.
- 41) 中村民雄(1994)剣道事典, 島津書房, p.250.
- 42) 当時は衆議院の議決に拘束力はなかったため、可決しても直ちに法改正とはならなかった。
- 43) 表8は以下より作成した。講道館(1937)小学校柔道講習会, 柔道, 8(7), p.32-34.
- 44) 著者不詳(1917)名古屋柔道界便り, 柔道, 3(12), p.113.
- 45) 著者不詳(1919)群馬県の柔道, 有効の活動, 5(9), p.18.
- 46) 著者不詳(1919)群馬県柔道講習終了者, 有効の活動, 5(9), p.65-66.
- 47) 前掲44), p.18.
- 48) 前掲45), p.66-67.
- 49) 著者不詳(1937)石川県下小学教員武道大会, 柔道, 8(4), p.39-39.
- 50) 著者不詳(1937)京阪神教員対抗武道, 柔道, 8(7), p.44.